



號五十七第  
 月二十年八十和昭  
 行發日五十月  
 行發日五十月  
 錢十六部一價年一  
 錢十六(共稅)分年一  
 一才、田杉 編人發行發  
 園公谷北日區町都京東  
 社信通盟同 社所行發  
 (頁八〇〇二出本號日)  
 (八〇一東東)

# 決戦段階の重大意義

## 勝利の年、職場即戦場

### 社長 古野伊之助

#### 大なる感激を回顧

二年前の今日、この朝、我等は米英に對する宣戰の大詔を拜したのである。二年前の今朝の感激、殊に宣戰の大詔を全國に、全世界に通報するの光榮を擔つた、われわれ同盟同志のその日の感激はどんなであつたか。



全世界より刻々に入る報道を手にしながら、いよいよ大本營の帝國陸海軍は米英兩國と交戦状態に入つたといふ第一報を聞き、續いて世界の最大最強を誇つた米英兩國を向ふに廻して皇國日本が起ち上る御聖斷を拜したときの、われわれの感激はどうであつたか。恐らくは一億國民一人々々が終生忘

るることのできる瞬間であつたと思ふのである。

未だ宣戰の大詔を拜するにいたらず日米交渉の推移を大小となく報道するの任務に當つた、われわれは一入その當時の國民全體の沈痛悲壯な感じを身に感じてゐたが故にその當時國民全般の心境を振りかへるにつれ、僅か二ヶ年の間に、全く東亞の様相が世界の情勢が、一變した、その偉大なる變化をただ驚嘆し、ただ感激するのみである。

#### 敵の戦争目的の矛盾

支那事變のため疲弊しきつたに相違なからうと思ひ誤り、經濟的壓迫の一手のみでも必ず屈服せしめ得ると思つたアメリカはあらゆる壓力を加へて、日本に對して經濟的宣戰を布告したのである。今日の世界の常識からみて、經濟宣戰が武力戰爭を伴ふことは當然のことである。

アメリカの誤算は遂に眞珠灣の攻撃となつて現れた今日アメリカが唯一の戦争目的として、その民衆を戦線にかり立てて、この戦争を無理矢

理に遂行しようとする口實は何であるか。曰く「眞珠灣を忘れるな」といふ、この一語のみである。そのほかにアメリカが、この世界戦争を遂行すべき何等の目的を持つてゐないことは極めて明かである。しかもこの眞珠灣を忘れるな、眞珠灣を記憶せよといふことは、逆に日本の國民から、アメリカに對して絶叫すべき言葉であり、アメリカが何の理由があつて、これを戦争目的に歸し得る根據がどこにあらうか。

しかしながら今日は既に戦争理論を云々してゐる秋ではない。實力をもつて敵の戦意を破撃滅するの一途あるのみである。

#### 皇國の大理想實現へ

二年前の今日、この日、米英に對する宣戰の大詔を拜するや、わが忠勇義烈なる陸海軍は世界の戦史上に類例なき雄偉壯大な太平洋作戦を敢行して、開戦僅か半歳の間に、太平洋全面の地域を確保占領してしまつたのである。僅か半歳

#### ボース首班來社

自由インド假政府首班ス・バス・チャンドラ・ボース氏は去る十一月十五日午後本社に古野社長を訪問し、舊知の福岡南方總局長はじめ本社幹部と膝を交へて懇談し、相提携して大東亞戦争完遂のため熱意を披瀝した。なほその際ボース氏は陪席者の退席を希望し、自己の隨員も遠ざけて古野社長と對面打ちとけて數刻にわたり意見を交換したが、非常に満足の状態であつた。また氏は本社を辭するに當り社内および東京中央電信局同僚分局长を見學し、同盟の偉力を賞讃してゐた。(寫眞は懇談々笑中の古野社長とボース氏)

の間に過去數世紀にわたる米英の東亞侵略勢力を驅逐掃蕩した。かくのごときは世界の歴史に、いづれの頁を繰つても發見することの出来ない大戦果である。

しかしてこの大戦争第一年はこの米英勢力の驅逐掃蕩、次いでその占領地内での戦力化に暮れたのである。次いで第二年には何が行はれたか、わが皇國日本は皇國の大理想を、そのまま實踐躬行するの決意をもつて隣邦支那の完全獨立のために、米英百年の侵略の跡を一つ一つ叩き潰してゐる。治外法權を撤廢し、外國租界を回收して、隣邦支那の完全獨立を確立した。次いでビルマ、フィリピン等の獨立、インドネシア人の政治參與など、聖旨を奉戴し、萬邦をしてその所を得しめ、兆民をしてその楮に安んぜしめる、この大理想を一步々々實現のものとしたのである。

#### 相互擁する世界觀

この大理想の實現を明確なる原則として表現したものが、さきに行はれた大東亞會議である。東亞十億の民族を代表する各國家の主班が一堂に會して、東亞全民衆が一心一體となつて、大東亞戦争を完遂し、大東亞建設の決意を中外に表明したのである。

大東亞共榮圏の共同の決意を表明した大東亞宣言の五大原則こそは實に「古今ヲ通シテ謬ラス中外ニ施シテ悖ラサル」千古不滅の大文字である。大東亞宣言を通じてみる皇國日本の、全世界に提唱する世界の新秩序は、要約するに結局共存共榮と互惠經濟、善隣友好の精神が一貫してゐることを痛感せざるを得ない。

これに對して米英兩國が執拗に維持せんとする世界の舊秩序は何であるか。弱肉強食、獨善經濟、

遠親近攻の觀念に基くものであるのだ。弱肉強食の世界觀と共存共榮の新世界觀、獨善經濟の舊世界觀と互惠經濟の新世界觀、遠親近攻の舊秩序と善隣友好の新秩序、この人類の方向を明確に分つべき戦争こそ今次の大東亞戦争である。

必勝不敗の地盤を確保  
 われわれは皇國日本に生を受け、て今まさに世界人類の方向を決すべき大決戦に直面して、われわれの全智全能を擧げて戦ひ抜くべき光榮と歡喜に浸つてゐるのである。この光榮ある皇國日本に生れてこの「古今ヲ通シテ謬ラス中外ニ施シテ悖ラサル」大理想、大信念に向つて、われわれの身命を捧げ得ることは何たる感謝、何たる光榮であらう。

かくのごとくにして大東亞戦争第一年において確保し得た、その地域を戦力化し得たのである。

第一年度における大戦果は全世界が總立ちになつても必勝不敗、嚴然たる大地盤を確保したのである。しかして第二年における國を擧げての努力は、千古不滅の大理想と大信念を確立して全世界に向つて闡明し斷言し得たのである。故に必勝不敗の地盤は既に出來た千古不滅の大理想は確立した。われわれはこの地盤の上に起ち上つて、この大目的に向つて一途邁進するの唯一途あるのみである。

開戦第三年こそ飽くまでも世界制覇の野望に眩惑されて一片の理想もなく、一片の信念もなく、あらゆる欺瞞と搾取に眼の眩んでゐる米英の戦争指導者共を、徹底的に破撃滅して、われわれの永久に、また東西古今を通じて謬らざる理想、信念の實現に向つて邁進するの年なのである。すなはち來るべき第三年こそ勝利の年である

(以下第三頁(續))



# 互助會報告

〔十月分〕

## △結婚

佐藤 貞夫 編輯局  
倉田 正一 同  
秋葉 武雄 同  
向山 啓雄 同  
小 林 修三 同  
達 上 大 三 郎 同  
乙 部 守 淳 同  
中 村 ヨシエ 同  
熊 澤 俊彦 同  
小 林 隆 資 同

## △應召・入營

淺井 堯雄(編輯局) 長女  
小山 武夫(編輯局) 次女  
澤村 三樹郎(編輯局) 長女  
池田 雄藏(編輯局) 長男  
横岡 莊之助(青森支局) 三男  
大藤 弘樹(廣島支局) 長男  
村上 清弘(佐賀支局) 同  
藤田 令允(南方支局) 長女  
高田 信一(大阪支社) 次女  
井上 美義(同) 長男

## △見舞

瀬谷 崎 孝 廣島支局  
森 才子(海外局) 病氣  
伊達 由夫(編輯局) 同  
岡田 貞藏(同) 同  
山村 喜左二(聯絡局) 夫人同  
堀田 重幸(同) 負傷  
塚本 貞之助(經濟局) 次男病氣  
白井 秀光(編輯局) 病氣  
小笠原 進(同) 同  
石川 良一(同) 夫人同  
杉本 恒彦(同) 病氣  
鈴木 茂(同) 夫人同  
佐藤 哲朗(聯絡局) 病氣  
大林 秀(海外局) 同  
松田 常雄(同) 夫人同  
吉田 富子(編輯局) 病氣  
石川 道別(經濟局) 同  
向井 啓雄(編輯局) 同  
河西 文子(總務局) 同  
倉田 幸次郎(同) 同  
石井 孝(同) 同  
石井 英二(聯絡局) 盜難  
小林 サヲ(編輯局) 病氣  
曾我 晴行(聯絡局) 災害  
布浦 富美子(總務局) 病氣  
岡田 朝雄(大阪支社) 同

## △慰

東村 種一(同) 同  
正木 和雄(同) 同  
吉田 雅子(同) 同  
鈴木 博三(同) 同  
内海 裕士(同) 同  
徳永 兼助(福岡支社) 同  
尾本 祐治(京城支社) 同  
高田 愛子(神戸支局) 同  
中村 敬一(同) 同  
小松 義明(廣島支局) 同  
小川 憲治(關門支社) 夫人同  
今泉 善次郎(平壤支局) 同  
龜井 忠三郎(北支總局) 同  
不老 正憲(同) 夫人同  
平山 清(同) 夫人同  
大塚 嘉次(中支總局) 病氣  
入澤 文明(同) 同  
岩井 和夫(濟南支局) 夫人同  
遠藤 晋(中支總局) 病氣

## △退社

岡田 正雄(札幌支社) 實弟戰死  
松川 仁善(京城支社) 次男死亡  
荒井 正勝(橫濱支局) 實母同  
酒井 茂子(長野支局) 實母同  
三浦 健次郎(關門支社) 次男同  
木下 國弘(大分支局) 實妹同  
原野 義雄(北支總局) 實父同  
國崎 一吉(太原支局) 祖母同  
尾本 祐吉(京城支社) 死亡  
大西 義賀壽(大阪支社) 同  
加藤 長雄(編輯局) 實母同

## 刷新改題

米英の極端より脱し共榮圈建設の巨歩を進める大東亞全民族に對し、盟主日本の生きた正しき姿を紹介せんとする同盟グラフは明年二月發行號より改題し、内容刷新を斷行することとなつた。その要旨は次のごとくである。

一、題號「大東亞報」  
一、體裁 B5判四頁  
一、發行 月二回(二日、十五日)  
一、定價 一冊五十錢(郵税一錢)  
寫眞に記事に從來のグラフ讀者も十分満足されるだらう。

## 社長訓示 (第一頁)

### 嚴たり我が艦艇勢力

われわれが大東亞戰爭第二年を送つて、將に第三年を迎へんとするに當つて、西南太平洋における戰局の様相をみると、三つの重大なる點を見逃すことは出来ないと思ふ。漸くわが國の航空兵力の充實が、その緒についたと思ふ途端にブーゲンビル島沖の大戦果、マルバート諸島沖の大勝利、マインヤル周邊における華々しき戰果と相次いで戰捷の詳報を得たが、その間、見逃すことの出来ない三つの點を感ずるのである。

その一つは恐らくは今日世界無比を誇り得る帝國海軍の艦艇勢力

が絶対に姿を現さぬことである。われわれはわれわれの戰場を通じてアメリカ軍が何と慌てふためいてゐるかがよく判つてゐる。ブーゲンビル、マルバートの場合において、さらに遡つてアリユンシヤンの場合においても、アメリカは必ず今度こそは日米艦艇勢力の一大決戦だといふことを全世界に宣傳した。しかしながら、わが帝國海軍は飽くまでも冷静に、飽くまでも沈着に、國の存亡興廢を賭する秋には何時でも「日本海々戰」を繰返すだけの決意をしつかり胸に收め氣狂ひのやうに立ち騒ぐアメリカの猪突猛進には相手にならない。日本海軍艦艇勢力が一切姿をみせないところに、無限の心強さ力強さを感ずるのである。

しかも今日の日本海軍は恐らくは世界無比の海軍力を藏するものであらうと察せられるのである。

山本 魂 は 生 く

次に感ずる第二點は敵の艦艇、航空母艦を一つ一つ捕提撃滅してゐるその戰果と同時に發表される未歸還機五機、十機と傳へられるのは、これは何事か物語るものであらうか。指揮官機が自ら挺身して敵の艦艇航空母艦に向つて玉砕してゐることを語るものでなくてはならないか。

すなはち山本元帥が「人の長たるものは自ら死をもつて難局に當れ」と挺身して國民の前に垂範された、この山本元帥の魂が一人々々前線の將兵の中に躍動してゐる

ことを讀みとらなければならぬ。私は未歸還機の数が大東亞の發表に傳へられる程度、ここに山本元帥が生きてゐるといふことを感ぜざるを得ないのである。

敵の總反攻を破摧

第三に何をみるか、ブーゲンビル島沖の戰果においても、マルバート諸島沖の戰に於ても、アリユンシヤンに於ても、アツツ島で玉砕した山崎部隊が、そのままに姿を再び南海の孤島に實現してゐることを、われわれは見逃してはならないと思ふのである。

山崎部隊はアリユンシヤンで玉砕したばかりではない。幾千、幾萬と散らばる南方の島々には、いづれも山崎部隊が蟠居して、皇國

日本の國土を安泰に守護してゐることを忘れてはならない。

かくのごとくにして、われわれは大東亞戰爭第三年を迎へて、この年にこそ第一年に確保した必勝不敗の地盤を基礎に、第二年に確立した確乎不動の世界新秩序建設の目的に向つて突進し、米英の總反攻を破摧撃滅する闘志を燃やすべきである。

前線統後の區別はない。銃後にゐるものも、前線にあるものも、一億一體となり、十億一身となつて、この大戰爭の完遂に邁進しなければならぬと思ふ。

戰場挺身の覺悟を固めよ

殊に第三年において、われわれは國家の思想戦を双肩に擔ふ同盟

同志の責任のますます重大なるを肝銘し、その全智全能を傾けて、全努力を掲げて、われわれの職責を果し、戰場をその戰場として、最後の勝利を確保するまで戦ひ抜かなければならぬといふ決意をここに新にするものである。

この前代未聞の時期に、この重大なる國家の使命を擔當する同盟の同志諸君は、來るべき第三年こそ、われわれの思想戦を勝ち抜いて、全世界の民衆をして皇國日本の抱擁する東亞、否、世界の新秩序、大理想、大信念のもとに、敵米英を屈服屈辱せしめなければならぬといふ決意をしつかり固めて戴きたいと思ふ。(昭和十八年十二月八日日本社大詔奉戴式における訓示)

### 本社直營活版印刷工場を設置

#### 業種別通信等印刷に劃期的能率を發揚

本社では業種別通信印刷のため活版印刷工場の設置を必要とし、かねて準備中であつたが十一月初めより急々營業を開始した。本印刷工場は麹町區内幸町一丁目元政友會裏手にあり、本社より二、三町の距離で頗る便利なところにあつて設備は時局下新機械の購入は不可能であつたが、優秀機械を他より買受け、開業の初めより最大能率を發揮しつつある。また工務員は根本工場長以下植字、文選印刷、解版、鑄造の各員とも大同盟傘下の一員として互に緊密に協力し和氣調々各目的の職場において

仕事と取組み敢闘してゐる。新工場は十一月三日をもつて諸設備一切を完了し、翌四日朝より全能力運轉を開始したが、特に當日午前七時半新工場において始業式を舉行した。即ち古野社長をはじめ塚本、石部兩局長、印刷所側長以下工員全員その他参列のもと開式、古野社長は「ニュースは兵器なり」と同盟印刷所の負荷する使命につき力強い訓示を述べられ「ニュースの正確敏速なる即時印刷化」といふ理想的通信事業の一翼達成への力強きスタートを切る

室、校正室、整版室合計百五十坪、倉庫五十五坪、發送室三十六坪  
機械設備 印刷機八臺(内譯四六全版二、菊全版三、四六半載一、菊半載二)紙載機一、鑄造機二、校正刷機一、紙型乾燥機一、鉛版鑄造機二臺および排氣裝置一臺  
整版設備 植字臺九臺、解版臺三、活字ケース臺二十臺  
なほ印刷所の主な所員は左の諸君である。

▲講師  
古野伊之助 社長  
長谷川才次 編輯局長  
板垣 武男 内經部長  
佐瀨 詩人 本社社員  
佐藤 啓之 本社特派員  
岩崎 正雄 本社特派員(陸軍報道班員)

▲上映映畫  
日本ニュース一七七號、一八三號、「海軍」、「山祭梵天」  
△日程  
十二月六日午後二時、六時 淺野會館  
七日午後一時、五時 湯本町 入山會館  
八日午後一時、六時 好問村 古河俱樂部  
同日午後五時半 日立製作所○○工場  
九日同 同 ○○工場  
十日同 三機工業  
十一日同 三機工業  
十三日同 三菱重工業  
十四日同 芝浦共同工業  
十五日同 石川島芝浦タピーン  
十六日同 三菱工業  
十七日同 久保田鐵工所  
十八日同 日立製作所○○工場

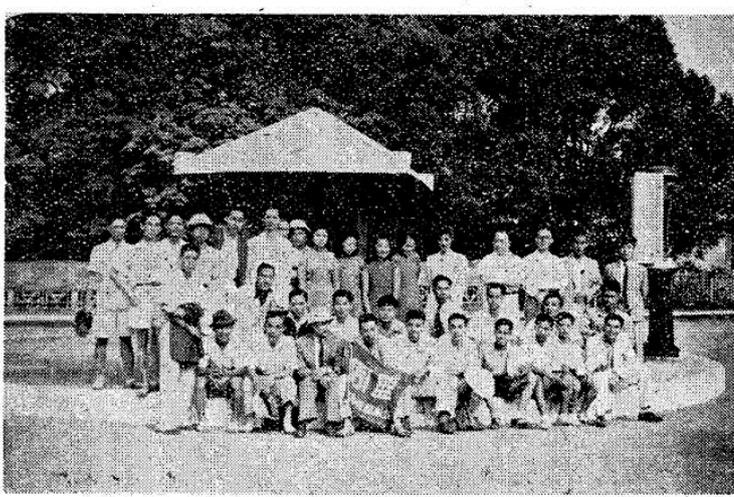
### 河内支局の鍊成行

### 皇軍慰問と汗だくの朗か競技

「新聞休日は支局全員揃つて鍊成だ」と十月八日大詔奉戴日にひらかれたハノイの支局當會は決議した。新聞休日だからといつて現地人雇員を休ませ、邦人社員のみ外に出てゆくやうな心懸けではない。身をもつて現地人の心懸けに、身をもつて大東亞共榮圈建設の理想とぶつかつてゆく。このため我々は新聞休日も現地人雇員と行動を共にし、一日を鍊成で過ごすのではないかと、支局當會決議によつて幹事は華文部、佛文部、安南部員、無電員、タイピストにボーイなど、年二回の新開休日の意義を汗だくで説き廻つて留守番役を除いて忽ち三十名の

参加者を決定、これに邦人社員九名の總勢三十九名で十七日午前六時出發した。目的はハノイ北方六十キロのビンエンだ。ここはハノイからラオカイに通ずる、かつての援蔭ルートの中樞、今はトンキン平原の北の關門として、軍事、交通の要衝だ。〇〇に駐屯する皇軍部隊を慰問し、また町外れの草原で支局鍊成會をひらこうといふのが、この日の豫定だ。

汗にまみれ、砂ほこりで眞つ白になりながら部隊を訪れ、支局全員が、心をこめてあつめた慰問品百冊の古書籍を差し出せば「こんな遠いところまで、わざわざ来て下



松田常雄著  
日支問題の解決  
同盟戦時特輯二十輯 賣價二十五錢  
佛印經濟の變貌  
B6判、一七六頁 賣價一圓五十五錢  
企畫院研究會著  
統制會の本質と機能  
B5判、一六八頁 賣價一圓三十六錢  
同盟通信社編  
同盟時事年鑑  
(昭和十九年版)  
B5判上製六五六頁 賣價五圓二十九錢

### 出版部新刊案内

# 郷軍同盟分會彙報

## 馬事教育實施

陸軍騎重兵學校  
に一日入營

帝國在郷軍人會同盟分會においては去る十一月二十八日陸軍騎重兵學校長中村少將の御厚意により未教育會員〇〇名に對し同會教育指針に示すところに従つて馬事訓練を實施するを得た。

この日前日來の防空訓練で徹宵不眠の會員も敢闘精神を發揮し、村田、上村兩部長をはじめ全未教育會員は寒風を衝いて定期同校に集合、六班に分れ、分會長以下幹部指揮のもとに同校教官前田光男少佐より懇切な實地指導教育を受け、馬事一般の知識を習得した。引續き馬手入、牽馬、飼與など各自に體驗せしめられ、正午將校集會所において晝食をしたため、午後は教導隊の輓馬馬演習、乘馬(障礙)教練を見學し、教導隊兵舎内において營内生活の嚴然たる軍紀を眼のあたりに了得し、貴重な一日を終つた。なほ古野社長、鷹嘴

## 支局新設

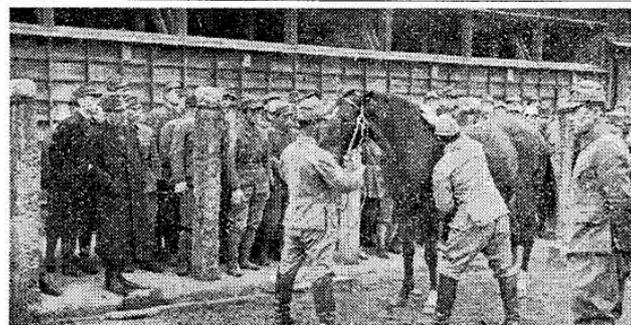
### ボンチヤナク支局開設

ボルネオ北部ボンチヤナクに左の通り支局を開設、十月十五日より業務を開始した。

### コタラジャ支局開設

今般左のごとくスマトラ、アチエ州にコタラジャ支局を開設、十

常務理事は特別参加されたが、最後まで熱心に見學された。  
(寫眞は陸軍騎重兵學校における馬手入實習、右方前田少佐、左方の外套を着用せるは古野社長(前)及び鷹嘴常務理事(後))



### 臺東通信部開設

十二月一日より左のごとく臺東通信部を開設した。  
臺東廳臺東街費町一三一  
(東臺灣新報社支社内)

### 伯林支局全燒

英空軍の盲爆で  
イギリス空軍は十一月二十二日

## 猪熊君射撃優勝

本社々會部勤務猪熊幸夫君は先般在郷軍人會東京支部射撃大會に同盟分會派遣選士として出場し、見事優勝して射撃記章と賞状を授

# 同盟産報鍊成彙報

## 大阪女子隊の非常炊出演習

空襲のため大阪支社屋の一部崩壊といふ想定のもと、特設防護團急接の非常時炊爨演習を支社全女子職員の手で行つた。十月二十六日から引續き三日間炊事場もなくなつたといふ假想に達報女子隊笹田第一班指揮下の十名は三升炊の大釜を裏庭に運び、溝石と煉瓦の缺けを積み應急施設を完成、板切れを割つて燃料を作り上げた。恰度その朝中央市場特別消費者組合から配給のあつた代用食、静岡産の甘藷五俵(六十貫)を運び出して各分隊毎に蒸芋を作る。かくてふかし立てのお膳を各部に配給したが、各部では意外な熱量補

## 産報武道選手優勝

同盟産報國會議鍊成部は舉社敢闘の古野會長の陣頭指揮に即應して一千五百の全本社員の銃劍術者中稽古を行ふなど郷軍同盟分會と密接な聯絡を保つて武技練習に精進を續けてゐるが、十月十日産報九ノ内支部の武道大會に左記選士を送り優勝の榮を獲得した。殊に青年隊より選抜された品治君は適齡前の弱冠をもつて善戦し、若き同盟のため大いに氣を吐いた。出席同盟選士氏名左の通り。

## 多摩道場に入りて

松野 喜作

私け今回同盟多摩道場の管理を命ぜられて十月八日この道場に入つた。これよりさき社長に面接して御話を伺つた。私け常に社長がわれわれ職員に福利と厚生施設のため並々な苦心を拂はれてゐることを知つて密かに感激してゐた一人であるが、今度直接社長の御話を伺ひ、そして職員に厚生なればに鍊成施設として社長のかけてらるゝる期待の極めて大きいことが窺はれて身の引締るを覺えたのである。退いて多摩川畔の元玉翠樓跡にきて、先づ私の眼に入つたものは墨痕淋漓たる「同盟多摩道場」の看板、私は仰いでしばし動けなかつた。

## 大阪支社で古本市開催

大阪支社では去る二月と五月の二回社内持寄り古本市を開いた。第一回は二十八冊、第二回四十五冊の出陣あり、入札を行つて愛書が他の愛書家の手に移つて行つたが、出陣中には島崎藤村の「破戒」初版物も飛出すといふ騒ぎで、稀覯本を手に入れさせて貰つてがっかりする人もあり有意義な企と好評を博した。

文字を選ばれたであらうところのお氣持を身に感じたのである。近時しきりに鍊成の聲をきき、また鍊成場の文字を眼にする。道場の意味はこの近代語と同意語と解されもするが、私はより一段の深き意味、即ち何となく日本精神的な力強さを汲取るのである。社長が例月の大詔奉讀日に、あの肺腑を抉るとき語調で時局の重大性と、われわれ同盟職員の使用を説かれ、且つわれわれ職員に覺悟と心構へを訓へられてゐるのを社報を通じて心耳に聴いてゐた私け、その度毎に「自分はこれでよいのか」と自問自答しつつ、自らを戒めて来た。

# 八日間の監禁生活

## 開戦當時の伯國の思ひ出

海外局情報部 椎野 豊

大東亞戰爭勃發後、私もブラジルにおいて監禁生活なるものを経験したが、これは八日間といふ極めて短いものであった。しかし他の人のそれは多少相違した點がある。二ヶ年以前の當時を回顧してみることとする。

### スパイ嫌疑で邦人檢舉

それから四十日ばかりの間、在伯同胞の身の上には、さしたる變化がなかつた。しかしクイン・メリー號のリオ入港をドイツへ放送した嫌疑でドイツ人が検束を受けはじめたから、そのとばしりは在留同胞にまでおよぶにいたつた。三月初旬ごろからリオの日本人も續々と捕へられて行つた。検束理由はスパイ容疑であつた。

### 青少年よ

今だ

奮起せよ

編輯庶務、宮原 清一

我々青少年は人生の花である。花であるが、もとより一朝の榮を誇るにすぎぬ花ではない。その前途には必然の任務たる結實といふ大業が待ち構へてゐることを忘れてはならない。即ち我々青少年は、この大業を成就するための準備時代であり、榮華散放時代であり、また身心鍛錬時代であり、人格陶冶時代である。この時代の努力奮闘が大なるを得るだけ、その結實もまた大なるを得るのである。

斷交後まづさきに捕へられるものと覺悟してゐた私には、案外檢舉の手がのびて来ず、かへつて心苦しい思ひをしてゐた。むしろ早く検束を受ける方が體面がよいと思つた。そして入獄の準備を着々整へて「萬一捕はれたら直ちに〇〇大臣に通告せよ」と家内に命じておいた。

### わが出先官憲を監禁

かういふ風に決心すると私は何ともいへぬ心の落付きを感じた。すべての行動も可なり大膽となつた。そして同盟通信員といふ肩書で、官憲乃至准官憲に接近し得る殆ど唯一の日本人であるかと思ふ私は改めて責任の重大性を痛感した。當時ブラジル當局は福輔國系通信員の登録を悉く剝奪したにもかかはらず、何故か私の登録だけを残してあつた。現在もなほ登録證を所有してゐるのである。

### 大膽な二つの提案

三月二十三、四日頃のことであつた。私は日頃知合ひの仲であつた新聞協會長エルベルト・モーゼスを訪問、二つの提案を行つた。その一つは「日本出先官憲の監禁を解け」といふのであり、他の一つは「同盟通信員の打電權を認めよ」といふのであつた。

### 差入れ辨當に舌鼓

海外諸國における同胞の獄中生活はいろいろの機會にいろいろのところで、いろいろの人によつて語られ、書かれてゐる。私はこの八日間の獄中記をくはしく書くつもりではないが、しかし獄へ投ぜられてから私の痛切に感じたことをただ一つだけ書いてみよう。

## 對 流 圈

### 化學的の「美爪術」?

指の爪を磨いたり、染めたりする美爪術といふのがあつた。決戦下推奨したことはないが、しかしすんなりした女の手の指を淡紅色に染めてゐるのなんか、文鳥の嘴をみるやうでなかなか可愛い。一番前どつかの髪床屋で爪磨きのサウヴィスをやつてくれたのに恐縮したことがある。といふのは僕の爪は恰好は悪くない方だが質がよくない。或る病でカルシウム不足を來し、こんなことになつたのだらうが、縦縞、横縞が爪の面をはしつてゐて艶がない。ところで今年の秋の中頃のことであつた。社の醫務室で例の注射をやつてもう爪をみるのと何とまあ爪が綺麗になつてゐるのだらう。表面はつやつやし、うすうすら紅がさして爪半月はくつきりと弧をなしている。縦縞や横縞は殆ど倒りとつたやうである。

このままさうしてセファラン療法半歳の效驗を證するものと斷定し得よう。僕がただ有難く感謝心に満たされた。(山生)

それは、私がその日宅へ歸りつくと殆ど同時であつた。幸ひ「もう來そうだ」と覺悟して、その朝は入獄後必要な小遣にと餘分に懐中したりしてゐたくらゐであつたので心の平靜を失ふやうなことはなかつたが、あまり感服せぬ刑務所入りが遂に實現したのである。

抑留所を出てから私の心境は以前にも増して時やかとなつた。また「二度とは檢束されまい」といふ安心が私の頭を支配してゐたので私は一層大膽に振舞ふことが出来た。そして幾度となく〇〇大臣を訪問して獄中に残つてゐる同胞の釋放運動に専念した。その甲斐があつて、その後數名を救出し得たことは私の監禁生活當時のものとも愉快な思ひ出となつてゐる。

散歩を許されただけで、日本のラジオは頻りにブラジル當局を詰り斷乎たる處置に出づべきことを放送してゐた。

三月二十三、四日頃のことであつた。私は日頃知合ひの仲であつた新聞協會長エルベルト・モーゼスを訪問、二つの提案を行つた。その一つは「日本出先官憲の監禁を解け」といふのであり、他の一つは「同盟通信員の打電權を認めよ」といふのであつた。

これは實際大膽な、また無鐵砲な提案であつたが、双方とも日伯關係をこれ以上悪化せしめないやうにしようといふのがその趣旨であつた。モーガス協會長は私の肩を叩いて「かかる勧告は欣然受ける」といつてよろこんでゐた。

果して私の右第一提案が容れられたら、どうかは知らぬが、出先官憲の監禁は翌日には綺麗に解決したのであるが、第二の提案が残つてゐるので、その後私は三度ばかり彼を訪問した。

しかし三度目に彼を訪問したときには、彼の態度は以前とは打つて變つてゾンザイで「君は日本のビネラルではないか」とか、「あの問題はアラトニヤ(親米外相)に話さねばならぬ」とか語り、テコでも動かない。

私は私の接近し得る最後の准當局(新聞協會長)の語問機關におさらばを告げ、内心多少の不安を覺えながら歸宅した。

美しいリオの海岸通をタキシードで走りながら私の心中には言ひ知れぬ淋しさを覺えた。或る種の豫感が私の心底を襲ふ。

遂に刑務所へ連行さる

果然私が警視廳の刑事三名に護衛されてリオの刑務所へ連行され